

# SuiteRec: Automatic Test Suite Recommendation System Using Code Clone Detection Tool

\*Note: Sub-titles are not captured in Xplore and should not be used

1<sup>st</sup> Ryosuke Kurachi

Information Science  
Nara Institute of Science and Technology  
Nara, Japan  
kurachi.ryosuke.kp0@is.naist.jp

2<sup>nd</sup> Eunjong Choi

dept. name of organization (of Aff.)  
Kyoto Institute of Technology  
Kyoto, Japan  
echoi@kit.ac.jp

3<sup>rd</sup> Given Name Surname

dept. name of organization (of Aff.)  
name of organization (of Aff.)  
City, Country  
email address or ORCID

4<sup>th</sup> Given Name Surname

dept. name of organization (of Aff.)  
name of organization (of Aff.)  
City, Country  
email address or ORCID

5<sup>th</sup> Given Name Surname

dept. name of organization (of Aff.)  
name of organization (of Aff.)  
City, Country  
email address or ORCID

6<sup>th</sup> Given Name Surname

dept. name of organization (of Aff.)  
name of organization (of Aff.)  
City, Country  
email address or ORCID

**Abstract**—ソフトウェアの品質確保の要と言えるソフトウェアテストを支援することは重要です。これまでに、テスト作成コストを削減するために様々な自動生成技術が提案されてきました。しかし、自動生成されたテストコードはテスト対象コードの作成経緯や意図に基づいて生成されていないという性質から後のメンテナンス活動を困難にさせる課題があり、これは自動生成技術の実用的な利用の価値に疑問を提示させます。本研究では、この課題を解決するために、OSS に上に存在する既存の品質の高いテストコード推薦するツール **SuiteRec** を紹介します。**SuiteRec** は、類似コード検索ツールを用いてクローンペア間でのテスト再利用を考えます。入力コードに対して類似コードを検出し、その類似コードに対応するテストスイートを開発者に推薦します。さらに、テストコードの良くない実装を表すメトリクスであるテストスメルを開発者に提示し、より品質の高いテストスイートを推薦できるように推薦順位がランキングされています。提案ツールの評価では、被験者によって **SuiteRec** の使用した場合とそうでない場合でテストコードの作成してもらい、テスト作成をどの程度支援できるかを定量的および定性的に評価しました。その結果、(1) 条件分岐が多いプログラムのテストコードを作成する際にコードカバレッジの向上に効果的であること、(2) **SuiteRec** を使用して作成したテストコードは検出されたテストスメルの数が少なく品質が高いこと、(3) **SuiteRec** を使用してテストコードを作成した場合は使用しなかった場合と比べて開発者は、自身で作成したテストコードに自信が持てることが分かった。

**Index Terms**—clone detection, recommendation system, software testing, unit test

## I. INTRODUCTION

近年、ソフトウェアに求められる要件が高度化・多様化する一方、ユーザからはソフトウェアの品質確保やコスト削減に対する要求も増加している [1]。その中でも開発全体のコストに占める割合が大きく、品質確保の要ともいえるソフトウェアテストを支援する技術への関心が高まっている。しかし、現状では単体テスト作成作業の大部分が人手で行われており、多くのテストを作成しようとする

に比例してコストも増加してしまう。このような背景から、ソフトウェアの品質を確保しつつコスト削減を達成するために、様々な自動化技術が提案されている。

既存研究で提案されている **EvoSuite**[2] は、単体テスト自動生成における最先端のツールである。**EvoSuite** は、対象コードを静的解析しプログラムを記号値で表現する。そして、対象コードの制御パスを通るような条件を集め、条件を満たす具体値を生成する。単体テストを自動生成することで、開発者は手作業での作成時間が自動生成によって節約することができ、またコードカバレッジを向上することができる。しかし、既存ツールによって自動生成されるテストコードは対象のコードの作成経緯や意図に基づいて生成されていないという性質から可読性が低く開発者に信用されていないことや後の保守作業を困難にするという課題がある [3]。このことは、自動生成ツールの実用的な利用の価値に疑問を提示させる。テストが失敗するたびに、開発者はテスト対象のプログラム内での不具合を原因を特定するまたは、テスト自体を更新する必要があるかどうかを判断する必要がある。自動生成されたテストは、自動生成によって得られる時間の節約よりも読みづらく、保守作業に助けになるというよりかむしろ邪魔するという結果が報告されている。

本研究では、この課題を解決するために OSS に存在する既存の品質の高いテストコード推薦するツール **SuiteRec** を紹介します。**SuiteRec** は類似コード検出ツールを用いてクローンペア間でのテスト再利用を考えます。入力コードに対して類似コードを検出し、その類似コードに対応するテストスイートを開発者に推薦します。さらに、テストコードの良くない実装を表すメトリクスであるテストスメルを開発者に提示し、より品質の高いテストスイートを推薦できるように推薦順位がランキングされています。

提案ツールの評価では、被験者によって **SuiteRec** の使用した場合とそうでない場合でテストコードの作成してもら

Identify applicable funding agency here. If none, delete this.

い、テスト作成をどの程度支援できるかを定量的および定性的に評価した。その結果、提案ツールの利用は分岐が多く複雑なプログラムのテストスイートを作成する際に、コードカバレッジを向上させることができることや、ツールを使用して作成テストコードの品質が高いことが分かった。また、定性的な評価として実験後にアンケートを実施し、推薦ツールを使った場合多くの被験者は自分の作成したテストコードに自信が持てることが分かった。

## II. BACKGROUND AND RELETED WORK

**Unit testing.** 単体テストの実行タスクでは、ソフトウェアを動作させ、それぞれのテストケースにおいてソフトウェアが期待通りの振る舞いをするかを確認する。テスト工程のコスト削減のため、テスト実行タスクにおいて、単体テストではJUnitなどのテスト自動実行ツールの利用が産業界で進んでいる。しかし、テスト設計タスクは未だ手動で行うことが多く、自動化技術の実用化および普及が期待されている。

単体テスト設計タスクで作成されるテストケースは、テスト手順、テスト入力値、テスト期待結果から構成される。テスト手順に従ってテスト対象のソフトウェアにテスト入力値を与え、その出力結果をテスト期待結果と比較する。これが一致していればテストは合格となり、一致しなければ不合格となる。単体テスト設計タスクにおいては、多くの場合同値分割法、境界地分析法などのテストケース作成技法を用いてテスト入力値を作成するが、ソフトウェアの要求通りに動作するかを確認するために多くのバリエーションのテスト入力値を作成する必要がある。

**Test case generation.** 既存の研究 [4] は、既存のテストケースを再利用、自動生成、または再適用できることによって、ソフトウェア開発のテスト工程における時間とコストを大幅に節約できることを示している。テスト生成技術は、主にランダムテスト (RT)、記号実行 (SE)、サーチベーステスト (SBST)、モデルベース (MBT)、組み合わせテストの5つに分類できる。SEはさらに静的記号実行 (SSE) と動的記号実行 (DSE) に分けられる。

RTとは、ソフトウェアにランダムな入力を与えるテスト手法である。無造作・均一にテストを実行するランダムテストは自動化に適しているが、コードカバレッジ率向上、バグ検出の観点において、テストケース1件当たりの効率は著しく悪い。

SEは対象コードを静的解析してプログラムを記号値で表現し、コード上のそれぞれのパスに対応する条件を抽出し、パスごとにパスを通るような入力値が満たすべき条件を集める。そして、パスごとにその条件をSMTソルバ [5] などの制約ソルバを用いて解き、得られた具体値をテスト入力値とする。

SBSTは、達成したい要件に対する達成度合いを定量的に評価できるように設計した評価関数に基づいて、ヒューリスティック探索アルゴリズムを用いて達成したい要件を満足するテストスイートを生成する技術の総称である。

MBTはモデルに基づいてテストスイートを生成する技術の総称である。モデルは何らかの形でテスト対象を記述したものであり、要求分析や設計のためのモデルを活用することもあれば、テストのためにモデルを作成することもある。

CTは、パラメータ間の相互作用に起因する不具合を効果的に発見するためにテストケースとしてパラメータに割り当てる値の組み合わせを生成する手法である。

### Test reuse using clone pairs.

**Test Smell.** プロダクションコードだけでなく、テストコードにも適切なプログラミングの慣習に従って設計する必要があります [44]。テストコードのを適切に設計することの重要性は元々Beck [7] によって提唱されました。さらに、Van Deursen ら [50] は11種類のテストスメルのカタログ、すなわちテストコードの良くない設計を表す実装とそれらを除去するためのリファクタリング技術を定義しました。このカタログはそれ以降、18個の新しいテスト臭を定義したMeszaros [42] によってより拡張されました。最近の研究では、テストスメルの存在は開発者のテストスイートの理解に悪い影響を与えるだけでなく、テストコードがプロダクションコード内の不具合を見つけるのにあまり効果的でなくなると言われています。

## III. SUITEREC

SuiteRecは、開発者からの関数単位のコード片を入力とし、その入力コードの類似コードを検索します。そして類似コードに対応するテストスイートを優先順位の高い順に並び替え開発者に提示します。図は、テストスイートが推薦されるまでのステップを示しています。

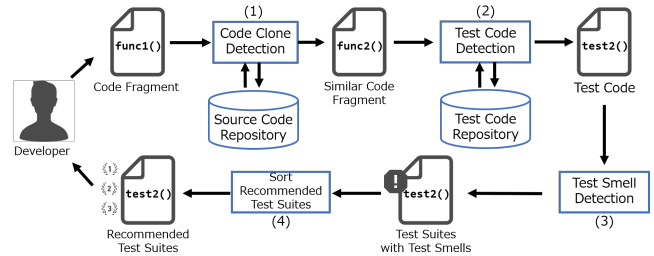


Fig. 1. Example of a figure caption.

- (1) SuiteRecは、入力されたコード片を受け取ると、そのコード片をコードクローン検索ツールにかけ入力コード片の類似コードを検出します。
- (2) 複数の類似コード片が検出されると、次にその類似コード片に対応するテストスイートをテストコードリポジトリ内から検索します。
- (3) 各類似コード片のテストスイートが検出されると、次にそれらをテストスメル検出ツールにかけ各テストスイートに含まれるテストスメルを検出します。
- (4) 最後に、1で得られた類似コードと入力コードの類似度と3で検出されたテストスメルの数を基に出力されるテストスイートの順番がランキングされる。

### A. 類似コード検索

本研究では、類似コード検出ツールとしてNICADを採用した。NICADは検索対象のコードフラグメントのレイアウトを統一的に変換させ、行単位で関数単位のコードフラグメントを比較することで、クローンペア検出するツールであり、このような手法を取ることで、高精度・高再現率でのクローンペアの検出を実現している。NICADの標準の検出設定で提案ツールに実装した。

## B. テストコード検索

類似コード片から対応するテストコードを検索するためにテスト対象コードとテストコードの対応付けを行う。本研究では、厳密にテストコードと対象コードを対応付けるために2つのステップを踏みます。

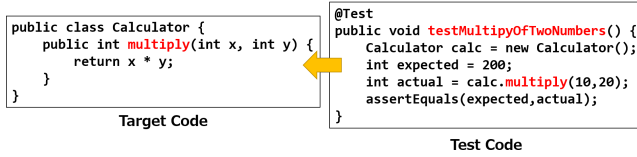


Fig. 2. Example of a figure caption.

- (1) テストコードを静的解析し、メソッド呼び出しを確認
- (2) テストメソッドを区切り文字や大文字で分割し、対象メソッドと部分一致した時対応付ける

単体テストでは、図の例のようにテストコード内でオブジェクトの生成が行い、テスト対象コードのメソッド呼び出して実行されます。すなわち、テストコードリポジトリ内のテストコードを静的解析し、メソッド呼び出しを取得することで、テスト対象コードとテストコードを対応付けます。ただ、テストメソッド内では複数のメソッドが呼び出されていることも考えられるのでさらに、メソッド名の比較も行います。テストメソッド名の記述方法としてテスト対象メソッドの処理の内容を忠実に表すことが推奨されており、対象メソッドの名前が記述されていることが多い。よってテストメソッドの名前を区切り文字や大文字で分割し、対象メソッドと部分一致した場合、対応付けるように実装した。

## C. テストスメルの検出

本研究では、テストスメル検出ツールとして tsDetect[6]を採用した。tsDetect は AST ベースの検出手法で実装されたツールであり、19 個のテストスメルを検出できるツールである。また、85 % ~ 100 % の精度と 90 % ~ 100 % の再現率でテストスメルを正しく検出できることが報告されている。本研究では、tsDetect で検出できる 19 個のテストスメルの内テストコードの推薦を考える上で重要な以下の 6 種類のテストスメルを提示するように実装しました。

- Assertion Roulette
- Conditional Test Logic
- Default Test
- Eager Test
- Exception Handling
- Mystery Guest

また、前処理として推薦テストコードとしてふさわしくない以下のテストスメルを含むテストコードを事前にテストコードリポジトリから削除し、推薦コードとして出力されないようにした。

- Empty Test
- Ignored Test
- Redundant Assertion
- Unknown Test

## D. 推薦ランキング

## IV. EVALUATION

このセクションでは、SuiteRec の定量的及び定性的に評価するために、被験者による実験結果を報告します。具体的には、以下のリサーチクエスチョンに答えて行きます。

- RQ1: SuiteRec の利用は、開発者の作成したテストコードのカバレッジにどう影響するか？
- RQ2: SuiteRec の利用は、開発者のテストコード作成時間に影響するか？
- RQ3: SuiteRec の利用は、作成したテストコードの品質にどう影響するか？
- RQ4: SuiteRec の利用は、開発者のテストコード作成タスクの認識にどう影響しますか？

### A. Participant Selection

我々は、基本的なプログラミングスキルを保有し、ソフトウェアテストに理解がある情報系の修士の学生 10 人対して行った。事前アンケートによると 9 割以上の学生が 2 年以上のプログラミング経験があり、8 割以上の被験者が 1 年以上の Java 言語の経験があった。また、すべての学生が授業などの講義でソフトウェアテストに関する基本的な知識を持っており、8 割以上が単体テストの作成経験があった。

### B. Object Selection

実験を行うために、3 つのプロダクションコードを用意した。被験者はテストコードを作成するためプロダクションコードの仕様を十分理解していることが前提のため、我々はプロダクションコードとして競技プログラミングをよく用いられる典型的な数学の問題を選択した。また、その問題の仕様を確認できるように自然言語で書かれた仕様書を用意した。3 つの各問題で違いを出すために問題 1,2,3 の順に条件分岐の数を 8,16,24 と多くなるように設定した。実験後のアンケートで、実験タスクについての理解を確認したがすべての被験者が実験タスクの理解についてポジティブな意見を述べたことが分かっている。また、十分な実験時間があったかどうかに関する質問に対してもネガティブな回答はなかった。したがって、被験者は与えられた実験タスクに対して十分に理解し、作業時間も十分にあったことが分かる。

```
public String returnResult(int score1, int score2){
    if(( score1 < 0 || score2 < 0 ) || ( score1 > 100 || score2 > 100 )) {
        return "Invalid Input";
    }else if( score1 == 0 || score2 == 0 ){
        return "failure";
    }else if( score1 >= 60 && score2 >= 60 ){
        return "pass";
    }else if( ( score1 + score2 ) >= 130 ) {
        return "pass";
    }else if( ( score1 + score2 ) >= 100 && ( score1 >= 90 || score2 >= 90 ) ) {
        return "pass";
    }else {
        return "failure";
    }
}
```

Fig. 3. Example of a figure caption.

### C. Experiment Procedure

まず初めにソフトウェアテストに関する基本的な知識から JUnit を使用に関する 30 分の講義と練習問題を実施し、テストコードの記述に対する理解を確認した。そして本番

の実験課題の3つのプロダクションコードのテストコードを作成してもらった。実験タスクの終了は被験者に判断してもらおう。具体的には、被験者自身が作成したテストコードのカバレッジ・品質に満足した時、実験タスクを終了してもらった。実験時間は1問につき最大25分の時間を設けた。推薦ツールの利用効果が問題によって偏らないように、被験者によってツールを利用の有無を問題によって変えるように割り当てた。また、推薦ツールを利用した場合の学習効果を防ぐために、3つの問題で連続してツールを利用しないようにタスクの割り当てを行った。また、過去の回答を参考にできないようにした。

## V. RESULTS

このセクションでは、10人の被験者による SuiteRec の定量的および定性的評価結果を報告する。前のセクションで説明したように、4つの研究課題について分析結果を提示します。

**A. RQ1: SuiteRec の利用は、開発者の作成したテストコードのカバレッジにどう影響するか？**

本実験では、被験者によって提出されたテストスイートの命令網羅と分岐網羅の2種類のコードカバレッジの計算した。カバレッジの計算には統合開発環境 Eclipse のプラグインとして搭載されている EclEmma を利用した。図1と図2はそれぞれ被験者による命令網羅と分岐網羅の割合を示す。結果として、命令網羅の割合は3つの問題すべてにおいてツールを利用した場合とそうでない場合で網羅率にほとんど違いはなく、どの問題も網羅率が90%を超えている。図2の分岐網羅についても分岐数が少ない TASK1 と TASK2 についてはツールを使用した場合とそうでない場合でほとんど差がないことが分かる。しかし、プロダクションコードの分岐数が最も多い TASK3 については、実験者の平均カバレッジに10%以上の差があることが分かった。この結果は、分岐が多いプロダクションコードのテストコードを作成する際に、SuiteRec で推薦されるテストコードは網羅率を向上するのに役に立つことが考えられる。実際に実験後のアンケートの記述欄には、推薦コードによって見落としていたテスト項目をフォローすることができたという報告が複数存在した。

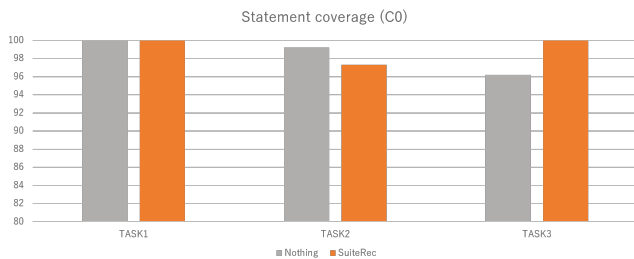


Fig. 4. Example of a figure caption.

**B. RQ2: SuiteRec の利用は、開発者のテストコード作成時間に影響するか？**

図5は、SuiteRec を使用した場合と何も使用しない場合で、テストコード作成タスクの終了までに費やされた時間を

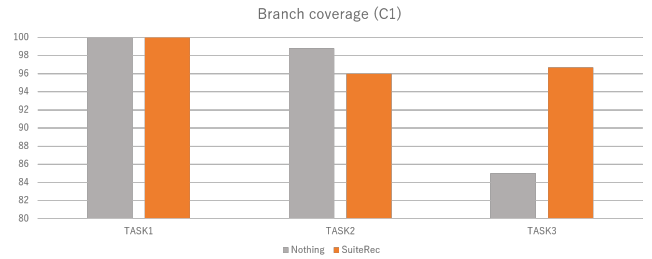


Fig. 5. Example of a figure caption.

比較しています。3つの問題の内、2つの問題で SuiteRec を使用した場合そうでない場合と比べてテスト作成時間が大きくなっていることが分かる。この結果は SuiteRec によって推薦される複数のテストスイートを読み理解するのに時間がかかる可能性があります。被験者は、推薦されるテストコードをそのままの形で再利用することができません。入力したプロダクションコードと検出された類似コードの差分を見てテストコードを書き換える必要があります。また、実験後のアンケートではテスト対象のオブジェクト生成の記述を再利用する際にその都度書き換える必要があり、時間がかかってしまったと述べている。問題2については、SuiteRec を利用した場合の方がテスト作成時間が短いことが分かる。我々は、提出されたテストコード調査したところカバレッジに差はないものの SuiteRec を使用しない場合はテストケース(項目)の数多くなっていることが分かった。この結果は、被験者は無駄なテストケースを多く記述するのに無駄な時間を費やしてしまった可能性がある。



Fig. 6. Example of a figure caption.

**C. RQ3: SuiteRec の利用は、作成したテストコードの品質にどう影響するか？**

図6は SuiteRec を使用した場合とそうでない場合で、提出されたテストコード内のテストスメル数を比較しています。すべての TASK に対して、SuiteRec を使用して作成されたテストコードはテストスメルをあまり含んでいないことが分かる。この結果は、推薦されるテストコード自体の品質が高く開発者はそれを再利用することで品質を維持したままテストコードを作成したと考えられる。また、ツールの出力画面で推薦されるテストスイート内に含まれているテストスメルを提示することで、それを基にテストコードを書き替えより品質の高いテストコードを提出した可能性が考えられる。実際のアンケートの記述でも提示されたテストスメルを理解し、それをなくすようにリファクタリン



グシテストコードを作成したという報告がされている。一方で、テストスメルが含まれていることは気づいていたがリファクタリングの方法が分からずそのまま提出したと述べている被験者も存在した。これは今後のツールの課題であり、テストスメルのリファクタリング方法も提示する改良がある。SuiteRec を使用しなかった場合は、使用した場合と比べ全体として 5 倍以上の被験者はテストスメルを埋め込んでいた。その中でも多く埋め込まれていたテストスメルとして、Assertion Roulette, Default Test, Eager Test が挙げられる。多くの被験者は、初期状態のテストメソッドの名前を変更せず一つのテストメソッド内でコピーアンドペーストによって Assert 文を記述していたのが原因だと考えられる。実際に既存研究でもこれらのテストスメルが既存プロジェクトで多く検出されていることが報告されている。

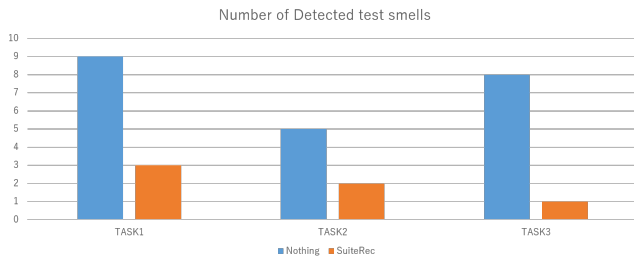


Fig. 7. Example of a figure caption.

*D. RQ4 : SuiteRec の利用は、開発者のテストコード作成タスクの認識にどう影響しますか？*

The IEEEtran class file is used to format your paper and style the text. All margins, column widths, line spaces, and text fonts are prescribed; please do not alter them. You may note peculiarities. For example, the head margin measures proportionately more than is customary. This measurement and others are deliberate, using specifications that anticipate your paper as one part of the entire proceedings, and not as an independent document. Please do not revise any of the current designations.

## VI. PREPARE YOUR PAPER BEFORE STYLING

Before you begin to format your paper, first write and save the content as a separate text file. Complete all content and organizational editing before formatting. Please note sections VI-A–VI-E below for more information on proofreading, spelling and grammar.

Keep your text and graphic files separate until after the text has been formatted and styled. Do not number text heads— $\LaTeX$  will do that for you.

### A. Abbreviations and Acronyms

Define abbreviations and acronyms the first time they are used in the text, even after they have been defined in the abstract. Abbreviations such as IEEE, SI, MKS, CGS, ac, dc, and rms do not have to be defined. Do not use abbreviations in the title or heads unless they are unavoidable.

### B. Units

- Use either SI (MKS) or CGS as primary units. (SI units are encouraged.) English units may be used as secondary units (in parentheses). An exception would be the use of English units as identifiers in trade, such as “3.5-inch disk drive”.
- Avoid combining SI and CGS units, such as current in amperes and magnetic field in oersteds. This often leads to confusion because equations do not balance dimensionally. If you must use mixed units, clearly state the units for each quantity that you use in an equation.
- Do not mix complete spellings and abbreviations of units: “Wb/m<sup>2</sup>” or “webers per square meter”, not “webers/m<sup>2</sup>”. Spell out units when they appear in text: “. . . a few henries”, not “. . . a few H”.
- Use a zero before decimal points: “0.25”, not “.25”. Use “cm<sup>3</sup>”, not “cc”.)

### C. Equations

Number equations consecutively. To make your equations more compact, you may use the solidus ( / ), the exp function, or appropriate exponents. Italicize Roman symbols for quantities and variables, but not Greek symbols. Use a long dash rather than a hyphen for a minus sign. Punctuate equations with commas or periods when they are part of a sentence, as in:

$$a + b = \gamma \quad (1)$$

Be sure that the symbols in your equation have been defined before or immediately following the equation. Use “(1)”, not “Eq. (1)” or “equation (1)”, except at the beginning of a sentence: “Equation (1) is . . .”

### D. $\LaTeX$ -Specific Advice

Please use “soft” (e.g., `\eqref{Eq}`) cross references instead of “hard” references (e.g., (1)). That will make it possible to combine sections, add equations, or change the order of figures or citations without having to go through the file line by line.

Please don’t use the `{eqnarray}` equation environment. Use `{align}` or `{IEEEeqnarray}` instead. The `{eqnarray}` environment leaves unsightly spaces around relation symbols.

Please note that the `{subequations}` environment in  $\LaTeX$  will increment the main equation counter even when there are no equation numbers displayed. If you forget that, you might write an article in which the equation numbers skip from (17) to (20), causing the copy editors to wonder if you’ve discovered a new method of counting.

$\BibTeX$  does not work by magic. It doesn’t get the bibliographic data from thin air but from .bib files. If you use  $\BibTeX$  to produce a bibliography you must send the .bib files.

$\LaTeX$  can’t read your mind. If you assign the same label to a subsubsection and a table, you might find that Table I has been cross referenced as Table IV-B3.

L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X does not have precognitive abilities. If you put a `\label` command before the command that updates the counter it's supposed to be using, the label will pick up the last counter to be cross referenced instead. In particular, a `\label` command should not go before the caption of a figure or a table.

Do not use `\nonumber` inside the `{array}` environment. It will not stop equation numbers inside `{array}` (there won't be any anyway) and it might stop a wanted equation number in the surrounding equation.

#### E. Some Common Mistakes

- The word “data” is plural, not singular.
- The subscript for the permeability of vacuum  $\mu_0$ , and other common scientific constants, is zero with subscript formatting, not a lowercase letter “o”.
- In American English, commas, semicolons, periods, question and exclamation marks are located within quotation marks only when a complete thought or name is cited, such as a title or full quotation. When quotation marks are used, instead of a bold or italic typeface, to highlight a word or phrase, punctuation should appear outside of the quotation marks. A parenthetical phrase or statement at the end of a sentence is punctuated outside of the closing parenthesis (like this). (A parenthetical sentence is punctuated within the parentheses.)
- A graph within a graph is an “inset”, not an “insert”. The word alternatively is preferred to the word “alternately” (unless you really mean something that alternates).
- Do not use the word “essentially” to mean “approximately” or “effectively”.
- In your paper title, if the words “that uses” can accurately replace the word “using”, capitalize the “u”; if not, keep using lower-cased.
- Be aware of the different meanings of the homophones “affect” and “effect”, “complement” and “compliment”, “discreet” and “discrete”, “principal” and “principle”.
- Do not confuse “imply” and “infer”.
- The prefix “non” is not a word; it should be joined to the word it modifies, usually without a hyphen.
- There is no period after the “et” in the Latin abbreviation “et al.”.
- The abbreviation “i.e.” means “that is”, and the abbreviation “e.g.” means “for example”.

An excellent style manual for science writers is [7].

#### F. Authors and Affiliations

**The class file is designed for, but not limited to, six authors.** A minimum of one author is required for all conference articles. Author names should be listed starting from left to right and then moving down to the next line. This is the author sequence that will be used in future citations and by indexing services. Names should not be listed in columns nor group by affiliation. Please keep your affiliations as succinct as possible (for example, do not differentiate among departments of the same organization).

#### G. Identify the Headings

Headings, or heads, are organizational devices that guide the reader through your paper. There are two types: component heads and text heads.

Component heads identify the different components of your paper and are not topically subordinate to each other. Examples include Acknowledgments and References and, for these, the correct style to use is “Heading 5”. Use “figure caption” for your Figure captions, and “table head” for your table title. Run-in heads, such as “Abstract”, will require you to apply a style (in this case, italic) in addition to the style provided by the drop down menu to differentiate the head from the text.

Text heads organize the topics on a relational, hierarchical basis. For example, the paper title is the primary text head because all subsequent material relates and elaborates on this one topic. If there are two or more sub-topics, the next level head (uppercase Roman numerals) should be used and, conversely, if there are not at least two sub-topics, then no subheads should be introduced.

#### H. Figures and Tables

a) *Positioning Figures and Tables:* Place figures and tables at the top and bottom of columns. Avoid placing them in the middle of columns. Large figures and tables may span across both columns. Figure captions should be below the figures; table heads should appear above the tables. Insert figures and tables after they are cited in the text. Use the abbreviation “Fig. 8”, even at the beginning of a sentence.

TABLE I  
TABLE TYPE STYLES

Table Head	Table Column Head		
	<i>Table column subhead</i>	<i>Subhead</i>	<i>Subhead</i>
copy	More table copy <sup>a</sup>		

<sup>a</sup>Sample of a Table footnote.



Fig. 8. Example of a figure caption.

Figure Labels: Use 8 point Times New Roman for Figure labels. Use words rather than symbols or abbreviations when writing Figure axis labels to avoid confusing the reader. As an example, write the quantity “Magnetization”, or “Magnetization, M”, not just “M”. If including units in the label, present them within parentheses. Do not label axes only with units. In the example, write “Magnetization (A/m)” or “Magnetization {A[m(1)]}”, not just “A/m”. Do not label axes with a ratio of quantities and units. For example, write “Temperature (K)”, not “Temperature/K”.

## ACKNOWLEDGMENT

The preferred spelling of the word “acknowledgment” in America is without an “e” after the “g”. Avoid the stilted expression “one of us (R. B. G.) thanks ...”. Instead, try “R. B. G. thanks...”. Put sponsor acknowledgments in the unnumbered footnote on the first page.

## REFERENCES

Please number citations consecutively within brackets [1]. The sentence punctuation follows the bracket [2]. Refer simply to the reference number, as in [3]—do not use “Ref. [3]” or “reference [3]” except at the beginning of a sentence: “Reference [3] was the first ...”

Number footnotes separately in superscripts. Place the actual footnote at the bottom of the column in which it was cited. Do not put footnotes in the abstract or reference list. Use letters for table footnotes.

Unless there are six authors or more give all authors’ names; do not use “et al.”. Papers that have not been published, even if they have been submitted for publication, should be cited as “unpublished” [4]. Papers that have been accepted for publication should be cited as “in press” [5]. Capitalize only the first word in a paper title, except for proper nouns and element symbols.

For papers published in translation journals, please give the English citation first, followed by the original foreign-language citation [6].

## REFERENCES

- [1] G. Eason, B. Noble, and I. N. Sneddon, “On certain integrals of Lipschitz-Hankel type involving products of Bessel functions,” *Phil. Trans. Roy. Soc. London*, vol. A247, pp. 529–551, April 1955.
- [2] J. Clerk Maxwell, *A Treatise on Electricity and Magnetism*, 3rd ed., vol. 2. Oxford: Clarendon, 1892, pp.68–73.
- [3] I. S. Jacobs and C. P. Bean, “Fine particles, thin films and exchange anisotropy,” in *Magnetism*, vol. III, G. T. Rado and H. Suhl, Eds. New York: Academic, 1963, pp. 271–350.
- [4] K. Elissa, “Title of paper if known,” unpublished.
- [5] R. Nicole, “Title of paper with only first word capitalized,” *J. Name Stand. Abbrev.*, in press.
- [6] Y. Yorozu, M. Hirano, K. Oka, and Y. Tagawa, “Electron spectroscopy studies on magneto-optical media and plastic substrate interface,” *IEEE Transl. J. Magn. Japan*, vol. 2, pp. 740–741, August 1987 [Digests 9th Annual Conf. Magnetism Japan, p. 301, 1982].
- [7] M. Young, *The Technical Writer’s Handbook*. Mill Valley, CA: University Science, 1989.

IEEE conference templates contain guidance text for composing and formatting conference papers. Please ensure that all template text is removed from your conference paper prior to submission to the conference. Failure to remove the template text from your paper may result in your paper not being published.